

降矢静夫俳句集『八潮躑躅』解題

安孫子昭二

An Anthology of Haiku, “Yashio-tsutsuji (*Azalea*)” by Shizuo Furuya

Shoji Abiko

はじめに

木俣美樹男が降矢静夫から寄せられた300通の書簡とインタビューを通して、教養ある山村農人を詳細に分析している（『山村農人の教養～20世紀の山里暮らし～』（『民族植物学ノオト 14号』2021）。分析のキーワードになるのは、降矢の書簡から抽出された豊富な語彙であり、「自然観」「農」「人生観」に大分類としている。

私も木俣に懇話されて、木俣・安孫子・金子愛々・滝川照子の書簡に副えられた降矢の俳句547首を年代順に編集するとともに、降矢の知己を得て16年間にいただいた499通の書簡を基に、降矢の生涯を解説した（『降矢静夫俳句集 躑躅（やしお）』）。

俳句にはもとより降矢の「自然観」「農」「人生観」が色濃く反映されているはずである。降矢は、太平洋戦争の末期に2年ほど出征したほかは、92年余の生涯のほとんどを峠に囲まれた山村の西原で暮した。降矢はいわば閉ざされた空間で何を見、考え、喜び、苦悩し、行動したのだろうか。木俣に倣い、私も俳句547首から降矢の生活誌を分析してみよう。

1. 降矢の俳句の起因と自由律

降矢は、俳句は戦後になってはじめたという。戦前は短歌を志していて歌集を作るはずであったが、出征中に自宅が延焼し、歌稿も焼失してしまった。痛恨の極みではあったが、入植移民のように歯を食いしばって苦難のどん底から再出発しなければならなかったから、生きること必死だったという。前記解説文から引くと次のようである。

「私は若い頃は文学青年で、短歌の方で同

人誌に参加して、県下の歌友雅友は沢山ありました。詩も好きで、土井晩翠先生を敬慕し、私の処世訓を戴き、今も使っています。『強く 正しく 朗に』は愛用の判です。歌稿も整理し、沢山の同人誌も揃え、歌集も作るはずでした。歌は農民歌人が好きで、師事を仰いだ歌人もあり（ましたが）、関係のものは焼けて了たんです。漢詩を心がけた事もあり、郷土史に熱くなったり。」（便313）

それでは降矢にとって俳句とは何であったのか。「・・・句は自己（へ）の挑戦でした。戦後は（短歌から）俳句に変わったが、今度は句帳もなく保存や発表も心せず、ただ自分の宿命へ挑戦のためで、只便りには時候挨拶に代え一句を作るのです。ですから自選句集を考えていませんでした。『雪虫』は私を支援して下さる方々の尊い御厚志で、恐らく『雪虫』に集まった句より句数は二倍や三倍作ったでせう。」（便373・470）

その俳句の師は、「拙宅の上の家 元参議院降矢敬雄先生勲二です。敬雄先生は新俳句（井泉水）高弟で、私の句はこの流れですが、一茶風ですよ。」（便161）。新俳句とは、萩原井泉水が提唱した季語を廃した自由律俳句のことであり、尾崎放哉・種田山頭火も井泉水の指導を受けているという。降矢には確かに季語にとらわれない自由で生き活きた句が多い。そういう眼で降矢の俳句をみると、季語が無いのもあれば重複するのもあり、拘泥はしていない。「自由律は2・3年で終り、その後は今の俳句を自分流で退屈しのぎに綴る次第です。・・・百姓も西原の皆好まない土地で、生涯抜けられない宿命に自分を慰める空白を埋めるためでした。（便341）」

例えば、里芋の季語は歳時記では秋になるが、降矢は季節を問わずその折々の情景

を詠んでいる。(句頭の数字は、『降矢静夫俳句集 躑躅(やしお)』掲載の番号に同じ)。

212	郭公よ里芋の芽が生えてきし	(初夏)
511	里芋の葉日に焦げたる暑さかな	(盛夏)
433	薯の露晝でも光る秋である	(初秋) 薯はサツマイモ?
224	秋日和大鍋かこむ芋煮会	(秋)
480	初霜や頭さげたり里芋も	(晩秋)
242	木枯や里芋埋め山の裾	(初冬)

それでは「歳時記」に無頓着なのかという
とそうではなくて、むしろ歳時記を知悉した
上でのことである。向学心は最晩年になっ
ても絶えることなく、89 歳の 1999 年 2
月に安曇野の次女宅に滞在した折には、松
本の書店で「新聞広告で見た新しい俳句の
歳時記を求め」(便 391) ている。

2. 農作業にみる画期

『降矢静夫俳句集 躑躅(やしお)』にあ
る 547 首は、明治 43 年 (1910) 12 月 20 日

生まれの降矢が、昭和 51 年 (1976) 2 月の
数え 66 歳の時から平成 15 年 (2003) 2 月
10 日に数え 93 歳で逝去するまでの 27 年間、
頭書の 17 句のほかは、私どもの便りに副え
られたものである。

過酷な農作業では 66 歳でも老境の域であ
ろうが、その後も降矢は逝去する間際まで
農作物も俳句も作りつづけた。この間には
体力の低下とともに作物にも違いが見られ
ようになる。その違いから 3 度の画期が
認められる。

I 期：昭和 51 年 (1976) ～ 昭和 60 年 (1985) 降矢 66 歳～75 歳

俳句 1～136 句 (136 句)

従前からの米作・麦作・養蚕を主体として、野菜も作る。

(句稿及び木俣への句)

II 期：昭和 61 年 (1986) ～ 平成 9 年 (1997) 降矢 76 歳～87 歳

俳句 137～393 句 (257 句)

米作・養蚕を止めて、雑穀と野菜作りが主体となる。

(木俣・安孫子・金子・滝川への句)

III 期：平成 10 年 (1998) ～ 平成 14 年 (2002) 降矢 88 歳～92 歳

俳句 394～547 句 (154 句)

野菜作りを主とし、網張りしない四国稗、麦も作る。

(木俣・安孫子・金子・滝川への句)

ところで、句の大方は「自然観」「農」「人生
観」に含まれるが、日常の暮らしを詠みこ
んだ句が 48 句 (全体の 8.4%) ある。この

中から年代の順に 20 句ばかりしぼり込ん
でみる。なお、句の下線は上記した画期の
区切り。

- 16 生活の疲れ黙して寝る夜寒
 22 あくびして背のびする猫と雨の私
 24 稗ぬきを終えて山の子昼寝かな
 (稗は田圃の雑草)
 107 蚕上りやまなこくぼみつ髯ののび
 (75 歳まで、小麦・米作の上に養蚕もやっていた)
 112 月代 (さかやき) に似る禿げこみやわれの秋
 128 山居して稗がゆ吸る雪こんこ
 147 焼酎の草疵うづきぬる今宵
 (アルコールは嗜まないのか薬用としてか)
 171 炎天下戻れば井戸の水にすぎる
 205 冬眠の吾もはい出ぬ春一番
 220 暑ければ暑しとグチす土用照り
 229 点滴の水滴見入りまた今日も
 (平成 3 年 1 月、30 年振りに入院生活 1 ヶ月)
 255 松蟬や更衣で忙し女房どの
 359 またの雪欠伸かみしめ刻み (たばこ) 吸う
 390 世にうとくいつか師走か疼く腰
 418 冬の夜や戸ゆすり風がふと眼ざめ
 435 マゴノ手で背を搔く夜長虫鳴きて
 461 明暗をこめて咲にし躑躅 (やしお) かな
 (17 年前に松姫峠で採取した幼苗が、卒寿を寿ぐように開花)
 492 どてら着て夢の亡父にぞ似たりけり
 (24 歳で死別した父の姿に自分の影が生き写しに驚く)
 497 一人来て二人出て行く春床屋
 538 目まどい (ぶよ) に追われてお盆の草むしり

3. 降矢の俳句—自然観

自然観に関わる語彙を抽出すると、時候の語彙が最も多い。次いで植物、動物の順になる。降矢の人生は、兵役に就いた 2 年間のほかは山に囲まれた西原で暮してきた。文学の素養があり感性鋭い降矢は、日々移り行く自然に目配りし微妙な変化を見逃さなかったから、降矢の俳句には自然に関する語彙が実に豊富である。そこでまず時候からとりあげようとする、何度も使われた語彙がある。

一つは、四季の移り変わりを表す春・夏・秋・冬の語彙である。暦の上では、立春から立夏までが春 (2/3 ~ 5/5)、立夏から立秋までが夏 (5/6 ~ 8/7)、立秋から立冬までが秋 (8/8 ~ 11/7)、立冬から立春までが冬 (11/8 ~ 2/2) となっている。降矢が詠んだ春夏秋冬の語彙であるが、ここでは郵便スタンプの日付けにより月別に振り分けてみる。暦の上での四季に対して、標高の高い山の村の四季の移り変わりはどうか。

3-1 四季の語彙

春 (17 種 25 句)

1 月： 52 春ごろ (1 句)

2 月： 30 春泥 135・299・495 春立ち 182・354・420・450・495・526 立春 205 春一番 402 春呼ぶ 421 春めきて 454 春遠し 496 春ごろ (15 句)

3 月： 99 春霞 119 春の雨 121 春眠 447 春憂い 497 春床屋 (5 句)

4 月： 252 春たけて 277 花の春 278 春の嵐 330 春雷や (4 句)

夏 (9 種 10 句)

5 月： 332 立夏 (1 句)

6 月： 169・214 夏至 238 夏木立 (3 句)

7 月： 33 夏草や 65 夏冷え 215 半夏生 431 夏の空 (4 句)

8 月： 512 晩夏 (1 句)

9 月： 515 夏果てて (1 句)

秋 (10 種 17 句)

9 月： 49・341 秋雨 293 立秋や 409 初秋 433・434 秋である 496 秋に入り (7 句)

10 月： 221 稲の秋 317 秋雨や 477 山の秋 474 秋しぐれ (4 句)

11 月： 317・342・377 秋雨 342 秋晴や 478・544 行く秋 (6 句)

冬 (15 種 19 句)

11 月： 26 立冬の 51 冬立て (2 句)

12 月： 116・440・441 冬枯れ 321 冬耕や 391 冬至 478 冬となる 488 冬冬だ (7 句)

1 月： 397 冬ごもり 418 冬の夜 419 冬天や 443・444 冬萌え 489 冬日 (6 句)

2 月： 6 冬日 360 冬着 116 冬枯れ 446 冬麗ら (4 句)

春夏秋冬の語彙と種類を多い順に見ると、春が 17 種 25 句、冬が 15 種 19 句、秋が 10 種 17 句、夏が 9 種 10 句となっている。降矢は、気持ちにゆとりがなければ作句はできないと言っている。そのことから勘案すれば、冬から春の句が多いのは、農閑期にあたるために作句する時間的な余裕があったことと、2 月は長く寒さに苛まれた冬から日脚がのびてきて、梅のほころびが待ち望まれたことにもよるであろう。夏の句が少ないのは、この時季の農作業が繁忙期なの

で作句する余裕がなかったのであろうか。しかし夏の前半は梅雨なので、梅雨の句 (12 句) が夏を代弁しているとすれば、ことさら夏の句だけ少ないというわけでもない。

3-2 風物詩的な時候の語彙

次のキーワードとなるのは、風物詩的な語彙でも特に多く使われているのに、雪、梅、桜、若葉、梅雨、菊、雪虫がある。そこでこれらの語彙も別個に抽出し、どのように使われているかをみてみよう。

雪 (43 種 51 句)

11 月： 74 山へ雪 (1 句)

12 月： 160 吹雪いて 245・546 初雪の 351 雪なき 522 雪舞って (5 句)

1 月： 3 雪となり 77 雪の道 126 雪がふり 137 新雪の 138 雪どっさりと 182

雪ふらず 270・394 雪もなく 271 雪となる 305・493 雪の日や 381 雪ごもり 395 かむる雪 396・397 雪の砦 415 雪なし 491 初雪 (17 句)

2 月： 7 雪になりたる 56 今朝の雪 80 雪おおう 128 雪こんこ 204 雪尺余 206・400 残雪の 248 雪降り 353 春の雪 356 雪雪で 357 雪どけの 357 またの雪 398 仰山な雪 401 雪掃いて 401 雪ばれ 402 残雪へ 494 雪の砦 525 雪つもる (18 句)

3 月： 82 春の雪 118 雪ふれば 163 雪ふらば 165 雪である 251 彼岸雪 251 雪つづく 327 雪つもる 359 またの雪 406 春雪の 497 残雪に (10 句)

梅 (16 種 16 句)

1 月： 37・52 寒梅 (2 句)

2 月： 20 梅の風 31 紅梅あからむ 38 紅梅の 98 黄梅の 117 梅からの 183 紅梅はじらいて 249 紅梅や 272 ちらほらと梅 457 梅の香が (9 句)

3 月： 58 梅の風 81 うめ咲いて 250 梅を折り 424 梅花滴して 455 梅咲きぬ (5 句)

桜 (8 種 11 句)

4 月： 86 桜咲たり 129 桜さけずして 139 さくらいま 231・499 桜咲く 309 山の桜へ 363・364 桜爛漫 167 葉ざくらや (9 句)

5 月： 42 桜 (はな) 散って 167 葉ざくらや (2 句)

若葉 (4 種 10 句)

5 月： 105・210・232・233・311・368・382 若葉風 283 柿若葉 502 山若葉 533 若葉冷 (10 句)

梅雨 (11 種 12 句)

6 月： 256・335 つゆ空 288 深梅雨 289 つゆ知らず 506 梅雨の晴れ間 507 つゆ入りの 537 梅雨つづき (7 句)

7 月： 45 戻り梅雨 62 遅れ梅雨 108 梅雨のおわり 122 荒梅雨 257 梅雨つづく (5 句)

菊 (9 種 12 句)

10 月： 344 菊の香 (1 句)

11 月： 132 菊咲けど 158・261・344 菊の香 180・243 菊す枯れ 262 菊咲いて 318 咲く菊や 345 菊の花 519 菊匂う 543 小菊咲く (11 句)

12 月： 485 寒菊や (1 句)

雪虫 (8 種 10 句)

10 月： 411 雪虫が (1 句)

11 月： 148 雪虫の 256・388 雪虫や 299・543 雪虫 346 雪虫を 479 雪虫か (7 句)

12 月： 388 雪虫や (1 句)

1 月： 419 雪虫舞いつつ (1 句)

時候で最も多い語彙は「雪」で、冬は 11 月末から 3 月半まで足掛け 5 ヶ月と長いからか、実に 50 句に上る。中でも雪にまつわ

る句が多いのは 1 月・2 月で、17 句ずつある、降矢宅は標高が 600m に近いのでよく雪が降るし、山蔭にあるから積ったらなか

なか溶けない厳しい環境にあった。しかも日照時間が6時間ほどのときもある。降矢は便りに時候として俳句を副えたが、メモは残さなかった。それなのにこれだけ雪にまつわる句が多いのに、語彙の重複がほとんどないのは、記憶の良さと状況を見極めて的確に表現する文学的素養によるのであろう。

梅は、2月に梅（白梅）と紅梅・黄梅が登場し、3月になると白梅だけになる。同じ語彙でも季節の移り変わりが感じられる。桜の語彙はほとんどが4月に収まるが、標高が高い西原では東京より開花が2週間ほど遅いようである。梅雨の語彙で不思議なのは、73歳までに作った句が梅雨後半の7月

に、83歳以降に作った句が梅雨前半の6月に偏る傾向がある。また菊も雪虫の語彙も11月をピークとして、前後の月にもわずかながら認められる。

雪虫は全国各地で冬の訪れを告げる風物詩として知られていて、白ばんば、綿虫、雪迎え等の愛称があるが、実体はアブラムシ科である。そこで昆虫の項にも置いた。降矢も11月後半に冬支度として畑の大根を抜いて圃大根にする頃によく見かけるので、好んで題材にしている。米寿記念の俳句集『雪虫』（1983）は是に因んで表題にした。また（74 山へ雪そろそろ来るか秋の虫）と詠まれたのも雪虫のことであろう。

3-3 その他の時候の語

- 1月： 2・10・29・270 山眠る 4 霰 11 枝打ち 29 立刈る 53 松明けて 28・303・380 松とれて 114 380 門松の 125 霧うまる 162 凧や 324・417 寒の入り 326 小正月 492・493 どてら （13種 20句）
- 2月： 5・26 氷柱 9 氷って 15・450 風花 150・307 寒明け 151・354・358 露のとう 325・355 如月 355 砂嵐 399 節分 450 山葵萌え 495 陽光さんさん 527 三月（やよい）まつ （11種 17句）
- 3月： 100 水ぬるむ 327 雛だん 455 雛の節句 529 杉花粉 （4種 4句）
- 4月： 47・277 花の嵐 59・275 花冷え 184 花の雨 273 花かげ 309・329 うららかや 331 萌芽の風 365 萌芽の山 403 芽吹き 448 日向ぼこ 499 木の芽風 （10種 13句）
- 5月： 106 八十八夜 185 葱坊主 167・404・530 葉ざくら 254 若竹 331・382・500 鯉のぼり 405 風さつき 427・500 新緑 382 青葉風 502 菜たねつゆ 503 草青む 534 栃咲きぬ （11種 16句）
- 6月： 3・237 桑の実 87・288・383 桜ん坊 188 さみだれの 255 更衣 335・504 みな月（六月） 337 しとしと雨 382・506 青葉風 383 雨なれど 465・507 青葉冷え （9種 15句）
- 7月： 45 施餓鬼会 64 紫蘇もみ 156 コビリ 193・220 土用 290 ほおずき 2 92・467 霧 371 海の日 466 沛然と 466 雷雨 （9種 11句）
- 8月： 66 流れ星 66 稲の穂の 96 夕立ちや 122・432 炎帝 171・219・303・432 炎天下 173 山霧 218 入道雲 294 送り火 340 終戦忌 384 茎立ちし 408・510 遠雷や （11種 16句）
- 9月： 48・197 白露 69 栗落ちぬ 91 懶雲 176・297・343 祭り 197 名月の 374 芋月の 433 芋の露 471・512・514 新涼 539 しぐれけり （9種 14句）

- 10月： 93 木の実ふる 375 山の霧 437 遠山日 475 夜長かな 476 宵祭り 477 紅葉
せり 541 おぼろ夜の (7種 7句)
- 11月： 75・133・243・347・539・540 時雨 96・157 小豆打ち 132 女おどし 162・
242 木枯し 198 草の実 200・201・387・416 落葉 244・404・438・481・546
小春日 478・483 草紅葉 (8種 23句)
- 12月： 9 氷 19 鳥喰柿 18・241 刈干柴 27・124・245 干葉 226・391 柚の香・ゆず
風呂 227・300・345・345・348・349 霜(霜柱) 266 あかぎれ膏 267・347・
349・382・521 みぢか日(短日) 350 落葉 390・413・520 師走 485 三頭風
487 木守り柿 488 裸木 545 木枯し (14種 28句)

時候全体の中から四季の語彙および風物詩的に多く使われた雪・梅・桜・若葉・梅雨・菊・雪虫の語彙を抽出した。ここでは残りの語彙を月別に列挙してみると、116種181句を数える。この項目の時候では12月と1月が多く、3月と10月が少ないが、先の項目や他の項目とも合わせてみる必要がある。

各月の語彙から情景を連想してみよう。1月は、若いときは松が明けると山眠中を植林の杉の枝打ち作業であった。2月は、寒さは厳しいが春の兆しも見えて、月末には露のとうも顔をだすようになる。「山葵萌え」は降矢の造語であろうか、西原の山葵田を彷彿とさせる。3月は雛祭りで、降矢は老年になって杉花粉に悩まされるようになった。4月は山の木々が芽吹きはじめる。「花」4種は桜のことで、桜咲く頃は花冷えが続きまとう。5月は若葉の候で桜も葉ざくらに変わり、菜の花畑も今はみかけなくなり、菜たねつゆも季語だけになってしまった。6月には若葉も青葉になるが、5月の「382 鯉のぼり尾をふるごとき青葉風」

は、若葉風よりも爽やかな感じがする。6月は10日頃から梅雨入りで鬱陶しいが、梅雨の晴れ間を夏着に衣替え、この頃には山の桑の実も桜ん坊も熟してくる。養蚕のときはてんてこ舞いの日々であった。7月は20日頃に梅雨明けとなり、酷暑がまっている。農作業の休憩時には木蔭でのコビリ(小昼=おやつ)が楽しみ。ほおずきはまだ未熟で青い。8月は、炎天に入道雲、遠雷、夕立ち、お盆の送り火と、子供の頃の田舎の情景が想起される。お盆が過ぎると急に涼しくなる。硫黄島に従軍した降矢には終戦忌が忘れられない。9月の空は大気がすんで芋名月と秋祭りの賑わいが気にかかる。10月はもう紅葉がはじまり、秋の夜長にすだく虫の声が聞こえてくる。11月は時雨することもあれば小春日もあり、女おどし(急激な天候の変化)に戸惑うこともある。12月はすっかり冬で、日は短いし、霜が降りて木枯らしが吹きつの中、降矢は来年に向けて畑にすき込む刈干柴刈りを怠らない。寒さと乾燥であかぎれが痛むが、ゆず風呂で一息ついている師走の夜である。

3-4 花の語彙

上記したそれぞれ花の語彙の掲載句から1句を順に抽出してみると、1月から12月にいたる季節の移り変わりが感じられる。

また降矢が眼をそそいだ花の種類が梅・桜を筆頭とするが、その他にも高木から低木、雑草、野菜の花の類に至るまで多種多様あることに驚かされる。

1月： 37・53 梅 (2句) (ゴチック体は掲載の俳句番号)

53 松明けて一輪一輪寒梅が

- 2月： 20・31・38・98・117・150・**183**・249・272・457 梅（紅梅・黄梅） **454** 水仙
496 柳の花（12句）
183 立春の日ざしの**紅梅**はじらいて
454 春遠し**水仙**寄添う日射しかな
496 春ごろ**柳**の花芽皮をぬぎ
- 3月： 58・81・250・424・**455** 梅 **151**・354・358 ふきのとう 101・**529** 沈丁花
（10句）
455 **梅**咲きぬ雛の節句や山の村
151 **落**のとう摘むのも奢り山居なり
529 杉花粉くすくす眼鼻へ**沈丁花**
（老境に入ったら花粉症になった）
- 4月： **41**・329・456・499 菜の花 59・103・129・139・184・**208**・231・273・275・**277**・
309・363・364・499 桜（花） 140・209・276・308・**425**・448 カタクリ **460** こ
ぶし 252・362・**426** なずな（28句）
41 **菜の花**や石の地藏も眠そうな
208 牛鳴いて**桜**咲きたり川はさみ
277 **花**の春散るも咲けるも慌しき
425 **カタクリ**や先立つ人の精霊か
（親友の死を偲んで）
460 日脚伸び**辛夷**の寺や夕の鐘
426 **なずな**咲く畑へ捨て置く鋤へ雨
- 5月： **42** 桜 59・**185** 葱坊主 105・**310**・311 藤 168・333・**405** 牡丹 279・**280**・
530 やまぶき 310・**461**・462・463 つつじ（八汐） **366** 桐 **428** 花菖蒲 **534**
栃の花 ?連翹（色紙にある）（18句）
42 **桜**（はな）散りてかじか鳴く水田に入れる
（米作は西原で1軒だけ、75歳まで頑張った）
185 **葱坊主**ならんだとなり南瓜うえ
310 **ふじ**咲きぬ相州武甲の山若葉
405 **牡丹**だよとはいいつつも風さつき
（このゑ夫人への弔句）
280 **山吹**や山裾の家に咲きたけり
461 明暗をこめて咲きにし**躑躅**（やしお）かな
（松姫峠の幼苗が17年目に卒寿を寿いで開花したことの喜び）
366 黍播いて春の名残りの**桐**の花
428 むらさきの眼にしみ通る**花菖蒲**
534 **栃**咲きぬ小豆の旬と亡母（はは）はいい
? **連翹**や問われし家を指で指し
（便りにはないが、卒寿記念の色紙の句）
- 6月： 153・**187** 白の花（野ばら・朴の花・すもも） 189・215・256・287・**337**・
338・509 栗の花 234・312・**531** 卵の花 **239** 蕎麦の花 **336** ジャガの花 **464**
山法師 **506** 茄子の花（16句）

- 187 六月は**白の花**心にも咲く
(卯の花、野バラ、山法師、水草、さては朴の花)
- 338 **花栗**や霧の中より匂いくる
- 531 **卯の花**や空家の垣に咲きにけり
- 239 **花蕎麦**のすがし花咲く遺跡園
(埋蔵文化財センターの雑穀見本園にて)
- 336 みなづきや山の畑の**ジャガ**の花
(亡母の命日6月15日に、新ジャガを掘って供える)
- 464 むっと出た枝に咲たる**山法師**
- 506 **茄子の花**梅雨の晴れ間惜しむかな
- 7月： 62・108・**236**・286 紫陽花 190・370 どくだみ **192** 合歓の花 193・258・
292・468・509 山百合 **216**・217 紅花 **384**・385 慈姑の花 **466**・537 沙羅
(18句)
- 236 **紫陽花**や傘さす女の顔みえず
- 190 **どくだみ**や梅雨の晴れ間を釈然と
- 192 喘ぎつつ小豆蒔ける**合歓**の花
- 193 **山百合**や土用出水の山の村
- 216 みちのくの**紅花**今日郡内で咲き
(7月10日 夢の花だった紅花 現実として開花)
- 384 茎立し**慈姑**(くわい)の今日は花咲けり
- 466 沛然と雷雨に散れる**沙羅**の花
- 8月： **23** 葵 **144**・259 虎杖 **312** 朝顔 **386** 慈姑の花 408・**473** 百日紅 **469** 竹煮草
(8句)
- 23 咲きのぼる**葵**の花の炎天下
- 144 いたどりの花のこぼれや冷やし麵
- 512 **朝顔**の蔓のびほうけ晩夏かな
- 386 末枯れたる**慈姑**(くわい)侘しく鎌を砥ぐ
(留守の間に水遣りされずに慈姑が枯れて)
- 473 **百日紅**晝の彼岸の回向かな
- 469 秋に入り荒れた畑の**竹煮草**
- 9月： **34**・316 曼殊沙華 70・296・**317**・341 秋海棠 145・**260**・295 吾亦紅
(9句)
- 34 忽然と炎の如く**曼殊沙華**
- 317 秋雨や**秋海棠**の余滴かな
- 260 ぽつねんと孤独の秋や**吾亦紅**
(西原になかった吾亦紅を苗で購入して)
- 10月： 25・**48** 萩 71・410・**434**・471 秋桜 (6句)
- 48 夏去ぬ白露置きたり**萩**の花
- 434 **コスモス**のうす紅色や秋である
- 11月： 132・158・261・262・318・339・344・**345**・484・519・543 菊(菊の香)
(11句)

- 345 菊の花おののきたりぬ今朝の霜
 12月： 52・225・**263**・264 茶の花 268・**389**・412・520 山茶花 **244** シクラメン
 (9句)
 263 茶の花へ蜂のまだ来る日ざしかな
 389 山茶花の朱を落しつつ日を惜しむ
 244 小春日や友が送れしシクラメン

花の語彙 54 種 148 句からいくつかの傾向を認めることができる。花にもカタクリのように開花期が短いのもあれば、百日紅(さるすべり)のように長いもある。新に入手して試作した慈姑は、7月29日に開花して8月29日に末枯れているので、8月の1カ月が開花期といえよう。梅雨の時期

が6・7月にまたがるように、月を超えて開花するどくだみのような花もある。梅はともかく、ここでは花の旬を平均1カ月内とみて、何れかの月に編入した。

花が咲く種類により、敢えて高木、低木、花卉、山野草等、野菜の花に分けてみると次のようになる。

- 高木の花：梅・桜・辛夷(こぶし)・ふじ・桐・白の花(朴・すもも)・栃・栗・山法師・合歓(ねむ)・沙羅・百日紅
 低木の花：柳・沈丁花(じんちょうげ)・やまぶき・躑躅(やしおつつじ)・連翹(れんぎょう)・卯の花・紫陽花(あじさい)・山茶花(さざんか)
 花卉の花：水仙・牡丹・花菖蒲・紅花・葵・朝顔・曼殊沙華・秋海棠・吾亦紅・萩・コスモス・菊・シクラメン
 野生草等：蔦のとう・カタクリ・なずな・どくだみ・山百合・虎杖(いたどり)・竹煮草
 野菜の花：菜の花・葱坊主・花蕎麦・ジャガの花・茄子の花・慈姑の花

次に、花の季節を見ると、春から夏の4月から8月にかけての花の種類がおおく、37種で89句に上る。また、多く詠まれた花の種類ベスト5は、梅(寒梅・紅梅・黄梅)が17句、桜(花・葉ざくら)が15句、菊が11句、クリが7句、カタクリが6句、山百合が5句の順となっている。梅も桜も寒さ厳しかった冬から解放され、春の到来が待ちこがれただけに多く詠まれたのであろう。早春の草花カタクリが6句詠まれて多いが、なぜか福寿草はない。6月は野ばら・朴の花・すもも・卯の花・山法師と白の花が多い

という。云われてみれば、5月の花は色彩が豊かな花が多いのと対極にある。また11月は菊の1種だけだが11句と多い。降矢は重陽の節句に因んで、菊の天婦羅が好みであった。一方、7月の紅花、8月の慈姑(くわい)の花、10月の吾亦紅(われもこう)、12月のシクラメンは、本来は西原にはなく、外部から持ち込まれた花である。シクラメンはともかく、降矢は何につけ好奇心も研究心も旺盛でいろんな新品種の栽培に挑戦しており、亡くなるまでその気概が衰えることはなかった。

3-5 動物—鳥や昆虫・家畜等—の語彙(ゴチック体は掲載の俳句番号)

- 鳥： 422 鳶 13 頬白 230・479・524 雀 84 鶯 21・39・**103** 鶺鴒(みそさざい)
 165・**365** 雉 167・253・282・334・369 つばめ 86・212 郭公 141・155・
 256・465・505 時鳥 157 雁 3・163・416・**487** 鳥・小鳥

- 422 輪をかいて**鶯**が春よぶ安曇野よ (2月 二女に誘われて安曇野に滞在し)
 13 鶴蔭の荒畑草枯れ**頬白**(とり)のなく (2月)
 230 春の**雀**鹿の子模様に畑へふり (3月)
 84 **鶯**声朗々春鶴蔭 薯古来窮乏救援 (4月 漢詩)
 103 **鶯鶯**(みそさざい)なく夕方に桜散る
 (「俳句集」には私のミスで、102・103・104句が欠)
 365 きじは鳴いて萌黄の山の夏近し (5月初)
 167 葉桜や**つばめ**の来る日になっている (5月10日)
 86 新梢へ**郭公**鳴きて山の麦 (5月中旬)
 141 万緑や忙々(せつせつ)とわれ**ほととぎす** (5月末)
 157 **初雁**が小豆はんでるたそがれる
 487 木守の柿へこどくな**小鳥**かな

鳥は11種27句が詠まれている。季節の順に並べてみた。降矢の鳥に向ける温かい眼差しが感じられる。多いのは初夏に渡って来る**つばめ**と時鳥が4句ずつ。降矢は**つばめ**の到来とともに、初夏の繁殖期によく鳴く**鶯**・**郭公**・時鳥・雉等の初鳴きを楽しみ

にしていた。「**鶯鶯**(みそさざい)なく夕方に桜散る」に接すれば、誰もが西原の春の夕べに憧れるではないか。これに対して年中見かける留鳥の**雀**は3句だけで、**鳩**や鳥の句はない。

昆虫等： 42・57 **かじか蛙**・**赤蛙** 330 **アリ** 120・281 **蝶** 60 **尺取虫** 143 **蚊** 194 **蛍**
 136 **あぶ** 538 **目まどい**(ぶよ) 33・109・255・294・432 **蟬** 408 **とんぼ**
 435・514・539 **虫** 130・174・199・314・315・475 **蟋蟀**(こおろぎ) 319・
 516 **蟪蛄**(かまきり) 18 **蜂** 74・148・265・299・346・388・411・419・479・
 543 **雪虫**

- 57 **赤蛙**騒ぎだしたる峡の川 (2月)
 330 春雷や**アリ**も私も慌てけり (5月)
 281 のらぼうのとうたち**蝶**のもつれかな (5月)
 60 黙然と桑の細枝の**尺取虫** (5月)
 143 **蚊**を追って団扇ものうし手のだるさ (7月)
 194 **蛍**飛ぶ鶴川ダムの噂たつ (7月)
 136 **虻**(あぶ)に夢破られる午睡かな (8月)
 538 **目まどい**に追われてお盆の草むしり (8月)
 294 **夕蟬**の送り火たける軒で鳴く (8月)
 408 遠来や**赤とんぼ**にげて百日紅 (8月)
 514 新涼の夕べの庭に**虫**の声 (9月)
 315 **こおろぎ**の土間に来て鳴く雨の宵 (9月)
 516 秋茄子をもぐ手にらむか**かまきり**が (10月)
 18 刈干柴(かりぼし)刈りされど**蜂**の威は弱し (10月)
 346 **雪虫**を土大根で追う日かな (11月)

昆虫や蛙等の句は15種40句を数える。昆虫には種類により出現期が限られるものと長いものがある。蟬には発生の順に春蟬→ニイニイ蟬→ミンミン蟬→アブラ蟬→ツクツクボウシ蟬になる。294の夕蟬はアブラ蟬であろう。

最も多いのは時候でも取り上げた雪虫で10句ある。次いで多いのが蟋蟀(こおろぎ)の6句で、いずれも鳴き声が詠まれている。

夕方から夜の鳴き声の「虫」も3句あるが蟋蟀だろうか、それともカンタン、マツムシ、スズムシ、ウマオイ、クツワムシか。それから私が子供の時分にはずいぶん多かった虻(あぶ)、蚊(か)、目まどい(ぶよ)は、農薬が使われるようになり減ったようだが、今も田舎では迷惑がられているのだろうか。ヘビやムカデ等も多く生息しているのだろうが、これらは詠まれていない。

家畜等： 5 山羊 22・81・497 猫 30・35 馬 208 牛 353・356・401・497 犬 68 狐
271・377 猪熊

5 屋根はいだ風に首だす山羊の小屋
81 うめ咲いて猫が背のびす日の溜まり
30 春泥や馬蹄ぼくぼく小径かな
208 牛鳴いて桜咲きたり川はさみ
401 雪雪でかまくらのごと犬の小屋
68 狐よけ針金はってとうもろこし
271 猪熊の騒ぎ談義で雪となる

家畜等の動物は7種13句が詠まれている。その中でも多いのは身近な存在の犬と猫である。降矢宅では山羊は飼っていたが、牛小屋・馬小屋はなかったように思う。西原では、上野原までの道が普請されてトラックが走るようになる昭和27年(1952)まで、馬は荷役用の主役となっていたという。野獣では狐、猪、熊が詠まれているが、近年

では猿と猪による作物の被害が増大している。なお降矢には、『郷土の総合雑誌 文化人』(1953 12月号)に狐のエッセイが掲載されている。以前は狐が多かったようだが、農薬の餌を喰った野ネズミが減り、そのネズミを餌にした狐も減ったのだという。

4. 降矢の俳句一農

農業を生業としているから農に関する俳句も数多く作られている。ここでは、農

作業、農作物、雑穀、食に分けて見て行こう。

4-1 農作業の語彙

1～2月： 11 枝打ち 29 竹刈り (2句)
4～7月： 42→24・46 水田・稗ぬき (3句)
5月： 533 竹の子掘り 106 茶摘み (2句)
1月中～9月末： 127→61・107→62→69・131 養蚕 (6句)
7月： 64 紫蘇もみ 192→96 小豆蒔き (3句)
8月： 65・386 鎌研ぐ 259 蕎麦まき 68 針金張り (4句)

9月： 110・373 網張り (2句)
 10月： 198 草刈り 344 栗うち (2句)
 11月： 387 落葉掃き 18・241 刈干 (2句)
 12月： 27・124・245 干葉あみ 321 冬耕 (4句)

農作業の句は30句だけ、意外に少ないのは日々が農作業なので敢えて詠みはしなかったのだろうか。ここでは1月から12月に至る年内の作業の流れを追ってみる。

127	かた眼いれ蚕へのねがい達磨かな	(1月中)
11	冬樹の枝打ち鉋は枝打つ	(1・2月)
29	竹林の竹刈る音や山眠る	(1・2月)
42	桜(はな)散りてかじか鳴く水田に入れる	(4月末)
46	夕立ちや稗抜き終えて昼寝よし	(7月末)
533	若葉冷えひねもす霧で竹の子掘り	(5月前)
106	茶摘みの青葉の眩し日は照って	(5月末)
61	蚕上簇(こあがって)暑くなる山の桜ん坊	(6月末)
62	遅れ梅雨あじさい咲きて繭出荷	(7月初)
64	紫蘇もめり香がする昼の雨の音	(7月中)
192	喘ぎつつ小豆蒔ける合歓の花	(7月後)
65	夏冷え鎌研ぐ山の杉木立	(7月末)
259	虎杖の花のこぼれや蕎麦をまく	(8月前)
68	狐よけ針金張ってとうもろこし	(8月後)
110	生き残る稗に網張る暑さかな	(8月末)
131	蚕上りを初栗めしも奢りなり	(9月末)
198	草刈らばあまた野良着に草の実が	(10月前)
344	菊の香や庭で栗打つ日和かな	(10月末)
387	頬冠り腰をかがめて落葉掃く	(11月後)
241	刈干やえっちらおっちら来ては刈る	(10月末)
96	短目の落日小豆打ち終る	(12月前)
27	短日や干葉あむ手へ日もあんで	(12月前)
321	冬耕や師走の空は冴えわたり	(12月末)

冬の作業には雪が降る前に行う冬耕と、漬物にした蕪の茎葉の方はあんで干葉にする作業がある。年が明ければ植林の枝打ちがあり、夏には植林の下刈りもある。4月末から5月初めには田圃を掘り起こし、水を張り田植の下準備にかかるが、真夏の田圃は除草とともに稲の生育を遮る稗抜きが欠かせない。降矢は75歳まで田圃作業と併行して、麦作と養蚕をやっていた。養蚕は

貴重な現金収入源であり、旧正月にはその年の豊作を祈願して繭玉を飾った。5月末から9月末までに春蚕、初秋蚕、晩秋蚕の3回、休みなく繰り返される重労働の日々であった。7月の紫蘇もみは、梅干しに漬け込む赤紫蘇のアクだし作業のこと。小豆は7月に蒔いて、秋に順次完熟した鞘から摘みとる手間がかかる作業であり、それを乾燥させて小豆打ちになる。栗打ちも秋日

和が続くのを見計らってであろう。夏の暑さに作物も成長するが、玉蜀黍を狙って狐がくるし、雑穀には小鳥が集団でたかるので老人には網掛け作業が一苦勞である。降矢は、86歳(1996)までは四国稗、黍、粟、穂モロコシを作っており、87歳になっても鳥が掛からない禾のある小麦と四国稗を作っている。

わずかに農閑期といえるのは冬季であろうが、木・竹が水揚げしない12月から2月半までが枝打ち、竹刈り時期であり、道具の手入れや藁を打ち縄を縛うなどもあったろう。百姓仕事は晴耕雨読といっても、初夏から秋口までつづく養蚕のときは梅雨時でも休めなかったから、それこそ「眼淫みて髯ののび」であった。それだけに繭の出荷は喜びも一入であったろう。

収載したのは降矢が老境に入った66歳

(1976)以降の547句であるが、75歳(1985)までは米作と養蚕もやっていたから、昭和の代の山村の暮らしがうかがえる貴重な資料といえよう。

4-2 農作物の語彙 (29種 72句)

野菜は大きく分けると、根菜類、葉茎菜類、果菜類になる。竹の子は根菜類かと思ったら葉茎菜類という。その他に柚子、柿の果物もある。歳時記ではそれぞれ野菜の旬が季語なのであろうが、降矢は季節を拘らずに播種も、開花も、収穫も感興に応じて自在に詠みこんでいる。西原ではどのような野菜が作られており、また降矢が多く詠みこんだ野菜もあれば、作ってはいるが詠まれなかった品種にある。それにも目を向けてみたい。

- 根菜類: 233→285→88→371 84・188・253・275・287・312・336・430・535・536 馬鈴薯 (ジャガイモ)
212→511→433→224→480→242 里芋 (前出) 265・299・346・388 大根 384・385・386 慈姑 (くわい) 437 さつまいも 450 山葵 (5種 29句)
- 葉茎菜類: 124・245 蕪(干葉) 59・185 葱 211・354 蔴 268 白菜 281 のらぼう 289 辣韭 (らっきょう) 362 キャベツ 481 京菜 456・499 菜の花 515 秋野菜 533 竹の子 540 野沢菜 544 間引き菜 (13種 17句)
- 果菜類: 68・195・372 玉蜀黍 (とうもろこし) 534・192→157→96 小豆 282・185→219→340→472 南瓜 211・284 苺 472 胡瓜 472 ゆうがお 516 茄子 (7種 17句)
- 果物: 19・113・133・487 柿 160 枳 226・298・391 柚子 (4種 10句)

- | | | |
|-----|-------------------------|------------------|
| 233 | 若葉風 ジャガ薯 の芽生えにけり | (5月前) |
| 285 | 馬鈴薯 の花咲きそめてみなづきへ | (6月初) |
| 88 | 母の忌や 新薯 供え新茶そえ | (母の忌は6月15日) |
| 371 | 海の日も山の畑で ジャガ を掘る | (海の日は7月20日前後の日曜) |
| 299 | 大根 を抜きつ雪虫そっと追う | (11月後) |
| 384 | 茎立し 慈姑 の今日は花咲けり | (7月前) |
| 437 | 友と別れ さつま を掘れば遠山日 | (10月末) |
| 450 | 立春や 山葵 萌出す鶴の川 | (2月前) |
| 245 | 初雪の 乾葉 あめる軒へ舞う | (12月後) |
| 185 | 葱 坊主ならんだとなり南瓜うえ | (5月初) |

211	行く春や苺もぎたり 落 の葉へ	(5 月後)
268	山茶花や 白菜 の押し重くして	(12 月中)
281	のらぼう のとう立ち蝶のもつれかな	(5 月前)
289	辣韭 を掘りたる雨間つゆ知らず	(7 月前)
362	キャベツ 枯れなずな咲く畑となり	(4 月後)
481	追憶の 京菜 漬たく小春日を	(11 月中)
499	木の芽風 菜 の花さくら咲くほどに	(4 月中)
515	夏果てて 秋の野菜 や雨が打つ	(9 月後)
533	若葉冷えひねもす霧で 竹の子 掘り	(5 月前)
540	しぐれけり 野沢菜 作れず戻りたり	(9 月中)
544	行く秋や 間引き菜 洗う日を追って	(11 月前)
195	ゴキーンと 玉蜀黍 をかいて箸	(8 月後)
534	栃咲きぬ 小豆 の旬と亡母（はは）はいい	(5 月中)
157	初雁が 小豆 はんでるたそがれる	(10 月中)
96	短日の落日 小豆 打ち終る	(12 月前)
282	つばくろの来た日うれしく 南瓜 うえ	(5 月中)
219	炎天下 南瓜 もぎたり手へ重し	(7 月末)
340	終戦忌 南瓜 の蔓は茂りけり	(8 月中)
487	木守りの 柿 へ孤独な小鳥かな	(12 月中)
131	蚕上りを初 栗 めしも奢りなり	(9 月末)
160	栃餅 や山家吹雪いて炉辺かな	(12 月前)
391	はや冬至 柚子 風呂の香に身を浸し	(12 月後)

野菜で最も詠まれたのはジャガイモ（馬鈴薯）で 14 句を数える。ジャガイモを山梨県では「せいだ」と称する。甲府代官だった中井清田夫（せいだゆう）が、江戸中期の天明の大飢饉で疲弊した領民を救済のために九州から馬鈴薯を取り寄せて領内の普及に尽力した、その恩人の名に由来する。小粒の屑薯を味噌と砂糖で甘辛くに煮た「せいだのたまじ」は、西原でも食卓の常備菜になっている。降矢は毎年、亡母の命日の 6 月 15 日には早掘りして供えとしていた。ジャガイモは 6 月末には茎が枯れて収穫期を迎えるが、そのまま 7 月下旬まで畑に寝かせた方が甘み増すし、この間に腐れる薯も選別される（中川智氏談）。中川・降矢の体験を通しての知恵であろうか。

次に多いのは秋大根で 4 句あり、いずれも雪虫が発生する晩秋から初冬の情景が詠

まれている。慈姑（くわい）は降矢が 87 歳の 1997 年に水耕栽培を試作したときの句で、花は枯れたが種は採れたはず。玉蜀黍は実が詰まった甲州玉蜀黍（粉は酒饅頭にした）が作られていたが、その後ハニーバンタムに変わったようだ。

降矢が作った野菜は少なくとも 27 種あるが、その他にも詠まれていない野菜は多い。根菜類では、蒟蒻、人参、牛蒡、山芋の 4 種、葉茎菜類では、玉葱、アスパラガス、春菊、鶯菜、芥子菜、ホウレン草の 6 種、果菜類では大豆（枝豆）、エンドウ、インゲン、トマト、エゴマ、夕顔の 6 種である。なお、ピーマン・シシトウ・唐辛子はなぜか見当たらない。

これらを合わせると、根菜類が 9 種、葉茎菜類が 19 種、果菜類が 13 種、果実が 4 種で、45 種になる。その他に自分で栽培した

食料として雑穀類が加わるから、植物質食料のほとんどは自給自足であり、中には蒟蒻のように換金したものもあったようである。ジャガイモ、里芋、玉蜀黍等は結構な量

を作っていて、子供たちや親縁者にも宅配便で送って喜ばれるのを生き甲斐としていた。私もずいぶん恩恵に浴したことであった。

4-3 米・雑穀等の語彙 (10種 31区)

42→46→24・66 稲作 26→86→368 麦作 161→366→175→373→376 黍 178・179・344 粟
110→111 稗 169・181→214 四国稗 293→313→302→322 トウジンヒエ 259→239→49→
375 蕎麦 367→172 モロコシ (穂もろこし) 163・207・334 雑穀

42	桜 (はな) 散りてかじか鳴く水田に入れる	(4月末)
46	夕立ちや稗抜き終えて昼寝よし	(7月末)
66	稲の穂のようやく見えて冷夏ゆく	(8月中旬)
26	立冬の穂やかな日和麦蒔きて	(11月7日)
86	新梢へ郭公鳴きて山の麦	(5月中旬)
368	つんつんと小麦穂を出し若葉風	(5月後半)
161	かべに掛く黍の種へ初日さし	(元旦)
366	黍播いて春の名残の桐の花	(5月中旬?)
175	黍のたれ穂ほのぼの手にし秋に入る	(8月7日頃)
373	背伸びしてどうかこうかと黍へ網	(9月中旬)
376	初霜の黍粟がらへ薄すらと	(10月末)
178	なが雨や粟穂うなだれ老いにけり	(10月10日頃)
179	木枯らしの粟穂ゆすぶる秋なかば	(10月20日頃)
344	菊の香や庭で粟打つ日和かな	(10月末)
110	生き残る稗に網張る暑さかな	(9月初)
111	稗の穂の収穫する手に実のこぼれ	(9月中旬)
169	雨ありて四国稗植ゆ夏至であり	(6月下旬)
181	海こゑし稗のすこやか祈る歳 (1989年賀状 インドのシタラム博士に)	
293	立秋やトウジンビエは出穂して	(8月7日頃)
302	天の意とトウジンビエの実り手に	(1月下旬)
313	炎天下トウジンビエの穂波かな	(8月下旬)
322	サバンナのヒエはろばろと畑にみのらし	(平成7年 年賀状)
259	虎杖の花のこぼれや蕎麦をまく	(8月6日)
49	日を重ね秋雨降りて蕎麦の花	(9月末)
375	山は霧麓の畑で蕎麦を刈る	(10月末?)
367	救い雨いとしくもろこし今日は植え	(5月後半?)
172	むろがやの郡内のもろこし穂いでにけり	(8月上旬)
334	つばくろや雑穀の苗は芽生えけり	(5月下旬)

米・麦・黍・粟・稗・四国稗・トウジンヒエ・蕎麦・モロコシ・雑穀の10種が31句詠まれている。この項ではそれぞれ雑穀の播種から収穫までの句を並べてみた。

降矢は小学校を出るとそのまま家業を継いだ形になり、実に1985年の75歳まで、米・麦・養蚕を併行して作っている。夏場は特に過酷な労働だったから体力の消耗が激しく、疲労困憊の体であったろう。降矢は気持ちに余裕がないと俳句も詠めないという。75歳時に木俣に寄せられた書簡9通のうち俳句が副えられたのは3句だけなのも、そうした事情ではなかったろうか(木俣「降矢さんテープ・手紙一覧表」による)。

そこで75歳時の136句目を境にして、作句された語彙から作付けされた種類に違いがあるのか否か見てみると、米・稗は確かに75歳前に偏っている。麦は77歳までで止め、86歳の年に久しぶりに小麦を作っている。蕎麦はともかく、黍・粟・四国稗・トウジンヒエ・モロコシは75歳以降に偏ったものである。しかし詠まれてはいないものの自家栽培で種継ぎされてきたはずである。もっともトウジンヒエは、1993年(降矢83

歳)に木俣から贈られたアフリカガーナ原産の種なので、論外である。このトウジンヒエは4月18日に播種して鉢植えにして育成し、翌年には結構な量を収穫して賞味するに至っている。雑穀栽培が75歳以降に多く詠まれたのは、養蚕と水田稲作から転換して多少はゆとりがでたからのようである。

なお、俳句に詠まれていないが、雑穀にも米と同じく糯(もち)種と粳(うるち)種がある。黍は糯種が一般的だが、これも木俣から入手した13粒の粳種を2年かけて7升の収量にし、“桃太郎の黍団子”を味わっている。

黍・粟・稗・四国稗の種は米・麦に比べると微細で、しかも播種から収穫するまでには移植や除草、鳥から防御する網張り作業があり、収穫してからも脱穀し、さらに精白から製粉の工程を経て食べられるようになる、たいへん手間の掛かる食料である。それにも拘わらず雑穀作りに傾注したのは、子供の頃から慣れ親しんだ味と生きる糧であった雑穀への感謝の念を自分の代で絶やせないとの信念があったようである。

4-4 食の語彙 (15種 19句)

115 麦飯 131・474 栗めし・栗 128・156 稗かゆ・稗餅 160 枳餅 210 黍餅 144 冷し麺
156 薯(前出) 115 葱味噌汁(前出) 72 しめじ汁 169 そば茶 504 桜ん坊 40・328
黒砂糖・砂糖湯 298 柚味噌 381 干魚 359・482 たばこ

115 快し**麦飯**と葱味噌汁 (年頭譜)
131 蚕上りを初**栗めし**も奢りなり
128 山居して**稗がゆ**啜る雪こんこ
156 夏の日のコビリは薯と**稗の餅**
160 **枳餅**や山家吹雪いて炉辺かな
210 若葉風友にすすめる**黍の餅**
144 いたどりの花のこぼれや**冷し麺**
72 好日やほのぼのいただく**しめじ汁**
269 若水で**そば茶**いただく冥加かな
504 万緑や食卓に在る**桜ん坊**
40 早春や吾へといえる**黒砂糖**

- 328 砂糖湯もほっと余寒の咳ぐすり
 298 柚味噌のほのぼのと友のあり
 381 雪ごもり干魚かみしめ友恋し
 482 短日やたばこ輪に吹き日を惜しむ (嗜好品)

食べ物が詠まれている句を抽出すると15種19句に上る。意外に少ないのは、野菜類が詠まれていないためであろうか。父から男子は厨房に入るな、出された食べ物は黙って食べろと言われたからであろう。詠まれた食べ物はいずれも素朴ながら清々しい一品で、慎ましい山家の懐かしい味が漂ってくる。句には詠まれていないが、降矢はカブの葉を干した干葉も好みで、「味噌汁で酒粕を加えれば寒い折のご馳走です。茹でて凍らせると味がいいです。」山家の食卓は、木俣が信条とする「素・美・暮」そのままの

印象である。

5. 降矢の俳句一人生観 (冠婚葬祭・祝賀)

冠婚葬祭を辞書で引くと、冠は成人式等、婚は結婚式等、葬は葬送、祭は先祖供養等となっている。字句通りに解釈して降矢の句を当てようとする、葬はともかくとして冠婚祭の句を該当しない。祭は文字通り西原地区の秋祭りとして理解し、冠婚は祝賀で一括してみよう。

- 葬：7・70・77・170・251・283・333・404・405・425・441 (11句)
- | | | |
|-----|-----------------|-------------|
| 7 | つれなさよ雪になりたる農の葬 | (甥の葬) |
| 283 | 柿若葉寺の鐘なる友の葬 | (小学校の同級生の葬) |
| 333 | 牡丹咲くとはいうものの逝ける人 | (田村女史への弔句) |
| 404 | 葉ざくらや妻の葬すみたそがれる | (このゑ夫人の葬) |
| 405 | 牡丹だよとはいうものの風さつき | (このゑ夫人への弔句) |
| 425 | カタクリや先立人の精霊か | (小俣光雄氏弔句) |
| 441 | 冬枯れや襟かき合す葬の列 | (友人の葬) |

祭：176・343・476 (3句)

- | | | |
|-----|-----------------|------------|
| 176 | 酒肴板野の里のよい祭り | (板野は西原の古名) |
| 343 | 鶴水やまつりの灯うかべ蜿蜒と | |
| 476 | 宵祭り山裾にかすかな灯が見えて | |

祝賀：51・92・177・261・262・273・304・407 (7句)

- | | | |
|-----|-----------------|------------------|
| 51 | 冬立ちて吾子は母へ似妻にも似て | (木俣の長女誕生に) |
| 92 | 熟年の秋ほのぼのとこのつどい | (十年ぶりに古稀の小学校同級会) |
| 177 | 金一封これはこれとは背をかがめ | (1988年の敬老会で) |
| 261 | 菊の香や野で焼く陶の展を祝ぐ | (金子の個展に) |
| 273 | 花かげや嫁ぎゆく吾子を整然と | (金子の長女結婚に) |
| 304 | 成人の日祝ぎうららか吾子ありて | (安孫子の長男成人に) |
| 407 | 勲章も定年もなき句集かな | (米寿記念の句集「雪虫」) |

おわりに

『降矢静夫俳句集 雪虫』（1998.8）のときは、「はじめに」を木俣さんが、「あとがき」を私が執筆した。その「あとがき」の末尾に下記の文面を認めた。

なお、ここには収載しないが、4人が頂戴してきた降矢さんからの膨大な書簡には、この22年間の農作業の内容をはじめ、野の花や植物に見る季節の移ろい、雑穀等に対する観察と哲学、西原の食生活、戦争体験、はては西原を襲った台風被害の状況といった、様々な内容がある。

これを項目別にして抜き書きすると、豊かな山村の生活誌を物語る珠玉の随筆になる。いま、本書の続編として、その編集作業に着手しているところである。このときは、末尾に折込んだ「降矢静夫 略年譜」「降矢静夫 農の歳時記」を作成するために、4人の書簡の文中から項目ごとに抽出する作業を行っていたから、間もなくその続編としてまとめられるはずであった。ところが『雪虫』を刊行して気がゆるんだことと、本来業務に加えて私的な研究活動が重なったことから、途中で挫折してしまった。気にはなりながら日頃の怠惰な性状が尾を曳いている間に、降矢さんも逝去されてしまった。

一昨年であったか、木俣さんの呼びかけで改めて重い腰を上げて、半ば忘れかけていた500通の書簡を函底からとりだして整理し直してみた。その結果の一つが「降矢静夫俳句集 躑躅（やしお）」の編集と解説である（『民族植物学ノオト』第14号（2021）所収）。本稿はその第二弾として『俳句集』の内容を分析してみた。またそれを検証するための資料として、別途「降矢静夫の書簡」を提示することにした。ずいぶん前に企画しながら挫折したままになっていた宿題を遅ればせながら提出することができたことに、ようやく胸のつかえが取れた思いである。

振り返ってみると、34年前の昭和62年（1987）5月初に、東京都埋蔵文化財センターの遺跡庭園の片隅に雑穀の見本畑を構想したことが、降矢さんとの出遭いにつながった。雑穀の種を入手する手立てを考えていたところ、たまたま近畿日本ツーリストのメセナ誌“あるく・みる・きく”136号（1986）に「甲武国境の山村・西原に『食』を訪ねて」（執筆者：賀曾利 隆）が特集されていた。それで、矢も盾もなく西原に脇坂芳野さんを訪ね、脇坂さんの案内を得て降矢さんに会い、粟、黍、四国稗、蕎麦等の種を分けていただくことができた。

あのかとき降矢さんは77歳、重労働だった養蚕と米作を前年に止めて一息ついており、雑穀作りの播種もこれからという時季であったのも幸いした。34年経って、偶々というべきか私もようやくあの時の降矢さんの年齢に到達したところである。しかし我が身に引きかえて、当時の降矢さんは知力・体力・気力とも老人とはとても思えない壮健さであった。降矢さんはこの先も亡くなるまでの16年間、体力の低下はともかくとして、書簡と俳句からも窺えるように、知識力・好奇心、そして勤労意欲は些かも衰えなかった。自分の行く末を考えると心許ない限りである。

雑穀の世界的権威の木俣さんは、昭和51年（1976）から雑穀研究のフィールドを西原に定めて以来、山村の食を支えた雑穀を深く理解して教養ある山村老人の知遇を得るとともに、肝胆相照らす仲として、トウジンビエや桃太郎の黍団子の由来とされる粳キビの種等をもたらした。その5年後の昭和56年からは、世界各地をバイクで駆け抜けてきた賀曾利さんが山村の食文化をテーマに西原に通って降矢さんと出会い、アフリカ原産のシコクビエ・トウジンビエを現地で食したときの印象をはじめ、旅先の興味深い話題で降矢さんを啓発した。そしてその5年後の昭和62年に、私も雑穀の種

を求めて唐突に西原を訪ねて降矢さんの知遇を得ることができ、日本列島の恵まれた自然の中で1万年以上も持続した縄文時代のこと等を折りに話題にし、また山形の紅花を持参して試作してもらったりした。分野を異にする三者が、何れも磁場に引き寄せられたような出遭いをし、降矢さんの生き方に共感してその縁が亡くなられるまでつづいたのであった。

西原は、何処にでるにも峠を越えなければならぬ山奥の小さな山村だから、社会的には閉ざされた印象がある。しかし降矢さんには若いときから郡内や県外に多くの知友があり、外からの訪問客はじめ書簡や

同人誌を通してもたらされる情報が知的好奇心を刺激し、知識・教養を醸成したように思えるのである。その意味では、私どももそうしたマレビト的な役割の一端を担ったようである。それが降矢さんの長生された一因であれば喜ばしいことである。

付記：

『民族植物学ノオト 14号』(2021)掲載の『降矢静夫俳句集 躑躅(やしお)』に下記の欠落・誤植がありました。多くは、木俣さんのメモ「降矢さんテープ・手紙一覧表」を参照させていただき明らかになったもので、木俣さんにお礼申し上げます。

句番号	正	誤
65	杉木立	杉木
96	短日の	短目の
102	鷓鴣鳴く暮方に桜散る	
103	ほろ酔いに花はらはらとたそがれる	
106	茶摘みつ・・・照て	茶摘みの・・・照って
111	稗の穂よ	稗の穂の
330	アリ	あり
352-2	杖ついて山の端へ出ず初日見ん	
360	又着る	又切る
371	ジャガを掘る	ジャガ掘る
402-2	残雪へ春呼ぶ雨のふりにけり	
402-3	明暗を重ねて米寿に達しけり	
419	雪虫舞つつ	雪虫舞いつつ
422	安曇野よ	安曇野世
454	春遠し	春通し
479-2	雪虫が短か日舞来て冬隣る	
481	京菜漬たり	京菜漬たく